

『視線の先には何が？』

ヨハネ 4:27～42

～主の畑は刈り入れ時～

「視線」と「目線」という言葉がありますが、これらは似ているようで、それぞれ違った使い方をされます。「視線」・・・視線の先には見えている対象がある。向かう方向があり、視線が止まる対象がある。これに対し「目線」・・・今の自分の置かれている立場を表す。この「視線」と「目線」には優先順位があり、「視線」の先に何ががあるか、その対象をしっかりと見つめていく必要があります。それに対して目線は自分が置かれている立場を表す言葉として使われています。したがって誰かの気持ちを理解しようとする場合、この目線が大切になってきます。今日の聖書のお話も、この「視線」と「目線」という観点から見る事ができます。当時、サマリヤという地域は、差別された所であり、誰もが嫌う所でした。ですから、そのサマリヤにわざわざ遠回りしていくイエス様の考えを誰一人理解できる弟子はいませんでした。イエス様はしっかりと見るべきものに「視線」を注いでおられました。しかし、この時の弟子達はサマリヤの人々を軽蔑する「目線」しか持っていませんでした。この様に「目線」だけで物事を見てみると、物事の本質が見えず、本当に大切な物を見失いかねません。私達もこの弟子達のようにならない為に注意しなければなりません。私達が見るべきものに焦点を合わせる為に**①目を上げる**。自分の足元ばかり見ては、先を見る事が出来ません。何を見るべきかわからなければ自信も持てなくなります。もし、今日の事しか見られてない自分が居るとすれば、その日生活する事が精一杯でとても先を見て行動する事はできないでしょう。しかし、それでは自分がどこへ向かって何をすれば良いのかわからなくなってしまいます。イエス様のように今日一日の生活が明日へつながるものでなければ、その日その日にこなす事も空しくなってしまいます。**②主が用意している畑を見る**。目線を上げた上で、私達は何を見るべきか。「畑」とは「収穫すべき所」を指します。私達が収穫の恵みを刈り取りに行く地は主が用意して下さっています。弟子達は「サマリヤの人は救われない。」と決め付けていました。しかし、イエス様が向けていた視線はそうではありませんでした。イエス様は全ての人を救いに導くという見るべき物をしっかりと見つめていました。私達も自分で決め付けている視線をもう一度神様に移して、見るべき物を見つめなければなりません。弟子達のように決め付けてしまうのではなく、私達に関わる全ての人がイエス様を知るべき対象なんだと認識し直す必要があります。「あの人は救われない。」と決め付けるのではなく、今、私達が遣わされている場所には意味があるのです。自分で領域を決めてしまうのではなく、視線を神様にシフトして私達に任されている畑は何処なのか、どういう領域なのかを知りましょう。**③その畑にも蒔いた人がいる**。収穫をするには種を蒔いて育てなければ収穫はできません。誰かが種を蒔き、それを主が育て、そして刈り取りの時期に主に任された人が収穫します。ここで注目すべきは、収穫するのは自分で種まきした物ばかりではないと言う事です。誰かが種を蒔き刈り入れ時になった畑を私達が収穫する事もあるのです。その新しい法則を頭に入れ、見るべき畑を知って頂きたいと思います。救われるべき人が目の前に任されているのに「あの人はクリスマスの時に・・・。」などと自分で刈り入れる時期を決め付けてはいないでしょうか。刈り入れ時の畑を放って置けば腐るか、食い荒らされるかです。今が刈り入れ時の畑を見逃さない様にもう一度、神様の視線に立って自分の領域の畑をしっかりと見つめなおしましょう。目を上げて見て下さい、あなたに任されている畑はもう色づくばかりになっています。